



## 涼しさは かや原 かや風 雲の上

「天上人になった感じ！！」と叫んだのは中学1年生の石井君。去る7月11日かやはらに降っていた雨が上がりかけた瞬間のことでした。同日の麗澤中学・フィールドワークの受入と、それに続く当塾今年度第2回フィールド・スタディーの結果、そして10月までの事業計画、等以下お知らせします。

### 1. 麗澤中学・フィールドワークの受け入れ結果について

水上町と共同で7月10日(木)～12日(土) 123人を受け入れ。当塾は7月11日(金) 青水の森(仮称)と水源の森(国有林)でのフィールドワークを担当した。

[青水の森] 清水英毅、富田良子、岡田康子、佐藤、中野慶子、海老沢秀夫、...

...、...

[水源の森] 高野史郎、湯本信康、...、...、...

(写真1、2)

担当者レポート「青水の森」 / 若き感性 茅場に学ぶ(富田良子)

水源の水手にこぼれ梅雨晴れ間

「この水、飲めるの?」「おいしい! 冷たい!」「どうしてこんなに冷たいのかなあ」「さあ、どうしてでしょうね」

次々問題提起し、ノートし、カメラに収める姿に感動。

茅場の中腹で一服。展望が開ける。山々の濃淡のコントラストが美しい。霧がやさしく流れる。

「天上人になった気持ちだよ」 素直に飛び出した中学生のひとは新鮮であった。

地元の長老から当時の茅場とのくらしについての説明に耳を傾ける。

茅場は村の人々がだいに守っていた。ワラビやハギなど種々の植物が共生していた。ワラビの根は機を織るとき、練って糸に張りを出した。ハギはカヤとまぜて使うと丈夫な茅葺きができたことなど、話はつきない。

最後にカヤ編み体験を終わって帰る中学生の一人一人の礼儀が正しかった姿勢が印象的であった。全体のテーマ、「飲水思源」の次のステップにどこまでつながったであろうか。

担当者レポート「青水の森」 / 改善点はいっぱいありそうだ(海老沢秀夫)

カヤ原だけのコースでは単調だった

- ・ 将来、ミズナラ林を含めたいいくつかのコースの設定と開発が必要
- ・ 「十郎太沢」に沿って流れを見ながら歩けるコースがほしい
- ・ 「水源地」から上のコースもほしい

中学生の4グループが同じコースできゅうくつだった

- ・ 複数コースの開発、複数プログラムの開発で分散化したい

コース情報が、勉強不足と経験不足で少なかった

- ・ 責任ある受け入れのためには、やはりもう少し知っていた方がいい
- ・ 今後の調査などを通じて情報収集を
- ・ コースごとの「キースポット」「キーポイント」を会員で共有したい

カヤ原、ミズナラの森を歩いてできる「プログラム」が準備できるといい

- ・ 発見促進プログラム、解説プログラム

### カヤ編み体験プログラムの改善も必要

- ・ 40人～4台の対応はたいへんだった
- ・ 複数の「カヤ」プログラムの開発（カヤ編み+茅の輪づくり+...）
- ・ 正統な藤原「炭俵」を地元古老から習って習得しておく
- ・ 材料の確保（カヤの葉を緑色の状態で保存する）

担当者レポート「水源の森」（高野史郎）

2ページ挿し絵入り

担当者レポート「水源の森」（湯本信康）

- (1)第一コースを担当しましたが、予想以上に歩行に時間をとってしまい、十分な指導ができませんでした。ブナ林の生活史（結実、芽生え、樹齢など）、落ち葉と土壌、樹幹のコケ、ブナ林の中の雨の行方などを話し、何かを気づいてもらうつもりでしたが、一方的な話で終わってしまい反省しています。
- (2)ブナ林の水源涵養機能を分からせるのは、私にとっては至難の技です。事前に生徒さんのテーマや質問をよく聞いておき、それを糸口に話せばよかったですと思いました。
- (3)コースを短くし、特定の一定地点でじっくりと説明し、観察してもらう方が効果的かも知れません。
- (4)自然観察だけではなく、森と人間との関わりを学ぶことも大切です。半日ほどかけて藤原の郷を歩き回り、生活に密着したテーマを自分たちで見つけて研究することも面白いと思います。

写真2枚

生徒の感想・礼状・はがき

4枚

## 2. 平成15年度第2回フィールドスタディの結果について

青水の森・ミズナラ林の現況を調べるための「毎木調査」を7月12日（土）～13日（日）にかけて、またカヤ場の利用と管理についてのヒアリング調査を宿泊所の民宿「山椒」で7月12日（土）夜におこなった。当塾からは22人、延べ54人の参加があった。

写真2枚

### 毎木調査～青水の森のミズナラ林はどんなミズナラ林なのか～

初日の7月12日（土）、麗澤中学受け入れのため前泊していたスタッフと当日到着組が午前11時、青水の森で合流。ゴルフ場との境界などを確認した後、「毎木調査」のための調査区画を設定した。場所はゴルフ場近くの「ミズナラ林」内。調べやすいように、10m×10mの区画3カ所を設けた。

2日目の13日（日）、3グループに分かれて3カ所の区画を調査。それぞれの区画で、高さ2m以上の木について1本1本、「種名（木の名前）」、「樹高（地面からの幹の長さ）」、「太さ（地上から1.3mのところの幹の円周）」、「生えている位置（区画内の位置）」などを調べた。

3区画を合わせた結果は表のようになった。

<毎木調査集計>

樹種名	本数	平均樹高	平均胸高直径	胸高断面積合計	
	本/m <sup>2</sup>	m	cm	cm <sup>2</sup>	%
イタヤカエデ	18	13.5	37.6	2,611	30.6
ミズナラ	9	11.2	28.2	1,843	21.6
ウワミズザクラ	32	5.6	9.6	1,157	13.6
コハウチワカエデ	26	3.5	5.8	936	11.0
ヤマザクラ	5	9.5	12.9	687	8.1

シラカバ	1	18.0	74.7	444	5.2
ミズキ	1	10.0	16.6	215	2.5
バッコヤナギ	2	6.3	10.1	161	1.9
ハリギリ	1	7.5	11.8	110	1.3
タニウツギ	5	3.0	4.5	90	1.1
ヤマグワ	2	2.5	6.4	64	0.8
ヤマウルシ	4	2.0	3.9	50	0.6
イロハカエデ	9	4.1	7.8	48	0.6
オオバクロモジ	10	2.0	2.2	39	0.5
リョウブ	2	2.0	2.9	14	0.2
ミヤマイボタ	2	2.0	2.4	9	0.1
ヒトツバカエデ	1	2.0	3.0	1	0.0
枯れていたもの	3	1.8	4.0	45	0.5
合計	133			8,524	100.0

ここで大切な数字は「胸高断面積合計」。1本1本の木に対して調べた太さから幹の「断面積」を求め、それぞれの樹種について合計を求めたもの。数字が大きいほど、調査区で目立つ種類ということになる。たった300m<sup>2</sup>の調査なので正確なことはわからないが、だいたいこんなことが言えそう。

- ・ イタヤカエデ（アカイタヤ）、ミズナラ、ウワミズザクラ、コハウチワカエデという4種類で、調査区の4分の3の断面積を占めている。
- ・ 特に背の高いイタヤカエデ（アカイタヤ）とミズナラの割合が大きいので、調査区の林はとりあえず、「ミズナラ-アカイタヤ林」としておきたい。
- ・ ある時期にこの場所は伐採されたと思われる。その時、よその場所からいくつかの樹木が入り込んできた。シラカバ、ミズキ、バッコヤナギ、タニウツギ、ヤマグワ、ヤマウルシ、ミヤマイボタがそうだと考えられる。
- ・ 一方、ミズナラ、カエデ類、サクラ類は、伐採の前からそこに生えていたと考えられ、伐採された後、切り株から芽を出したものが多い。
- ・ 低木にオオバクロモジがある。この木はブナ林セットででてくることが多いので、調査区はやがてブナ林に移っていくと考えられる。現時点では、「ミズナラ林一步手前の段階」で、ブナ林へは「2、3歩手前」の段階だろうか。
- ・ それでは、この場所はいつ伐採されたのだろうか？ その前はどんな使われ方をしていたのだろうか？ 私たちの「青水の森」の歴史を、今後の調査やヒアリングで明らかにできればうれしい。

古老ヒアリングのまとめ～茅場の利用と管理について～

[日時・場所] 7月12日(土) 20:00～・民宿「山椒」

[地元のみなさん]

吉野かつみ(大正13年3月2日生まれ) / 蕎麦づくり、コーラス

林包芳(はやしかねよし・84歳) / 桶職人、炭焼き師

林親男(はやしちかお・62歳) / 元町議

中島武(なかじまたけし・45歳) / 藤原ナチュラリスト、民宿「ゆきわりそう」経営

阿部惣一郎(あべそういちろう・72歳) / かやぶき職人、民宿「樹林(きりん)」経営

高田保(たかだたもつ・昭和9年生まれ70歳) / 1000坪の畑、民宿「山椒」経営

[ヒアリングまとめ]

- ・ カヤ場は、各集落ごとにもっていた。

- ・ カヤ刈りは10月末に「エイッコ」(結い)でやった。
- ・ 刈ったカヤは「丸ニウ」に積んでおき、11月末、雪ぞりでカヤを運び出した。
- ・ カヤ場の「野焼き」は雪解けのころ、個人で雪の消え間を焼いた。
- ・ 「野焼き」はカヤだけでなくワラビなどのためにも必要だった。
- ・ 昭和18年ごろ、「義勇軍」がカヤ原を畑にして、ジャガイモやカライモ(キクイモ)を作った。
- ・ 戦後(昭和22、3年ごろ)学校林などのため、山側にカラマツの植林をした。そのため、植林地とのあいだに「火防線」が作られた。
- ・ 30年ほど前(1970年代)に国土開発がカヤ原を購入、20年前にゴルフ場にした。
- ・ 山の口明けには、カヤ以外に「ハギの口明け」というのがあった。ハギの葉は馬の飼料に、茎は炭俵のフタにした。
- ・ 野焼きをするといいワラビがでた。特に「ワラビ粉」は大切な現金収入源だった。「機織り」や「番傘」の糊(のり)の原料として、桐生や京都へ出荷した。ワラビ粉は各家でつくり、うわずみの黒い部分は「焼き餅」などにして食べた。
- ・ 屋根の茅葺きは、昭和35年ごろが最後だった。
- ・ 屋根を葺くには、カヤが5000束は必要だった。
- ・ 藤原には竹がない。代わりに、マンサク、ナラ、クリ、サルスベリ(リョウブ)、ヤマウルシなどのまっすぐなものを、茅葺きのときの押さえ棒(オシブチ)に使った。

## 大幽探索レポート（川端英雄）

「修験道場『大幽』（おおゆう）を覗く」

ましら・安楽、冷静・片平、沈着・浅川、悠々・滑志田、賢明・木村（以上敬称略）と蒙昧・川端の6人が、大幽（おおゆう・洞窟）に挑戦。草上の昼寝組に別れを告げて、林道に入る。

名倉川のせせらぎを右の耳にききながら、開鑿されてまもない水気たっぷりの、ただ草木を切り開いただけの状況の林道を登る。太い草の切り株？がやたら靴底を刺激する。

大幽は修験道の行者の修行場だった、ふもとの村の子供たちがこれから登るとか、登ったとかの、賢明・木村さんの解説が聞こえる。



せせらぎのほかは鳥の声もほとんど聞こえず、6人の会話が最初はにぎやかに、ついでときおり、やがて元のせせらぎのみの静寂の中を、のぼる、登る。

木々の香りに包まれながら、1キロメートルあまり歩いたろうか、左手に大幽沢十二社があった。長く伸びた隊列もここで一服、全員そろろう。

蒙昧な私には何の木か云えないが、大きな樹の根方に石造りのちっちゃな切妻屋根の神社が鎮座しておわす。「十二という数は神仏に縁があるんだよな！」と、どなたかがつぶやく。十二神将・十二天・十二因縁・十二光など。キリスト教でも

十二使徒がある。十二支（えと）、十二単衣（ひとえ）、十二指腸は長さが指十二本分の長さからだと。だんだん、神仏から遠くなる。

山の神のことを、十二様（じゅうにさま）と言うところもあり、この大幽沢十二社は藤原郷で生活していたきこりや、獵師をまもる神様だったのだろう。そしてこの神様を、13日帰途立ち寄った民芸店のご主人大坪儀一氏が、「大利根仙人」として郷土玩具に体現されたんだろうと思う。（それにしてもお土産に買った「大利根仙人」は重かった）

修復されて日も浅いという、「修蔵の炭焼き窯」にあえぎあえぎ辿りつく。悠々・滑志田さんが興味深げに眺めている。ここまでのトップも、軽やかな登りのましら・安楽さん。このあたりであろうか、賢明・木村さんが転進されたというのは。

ここを出てからしばらくで、道はぬかるみを増し、道幅狭く、きつさはいや増す。「つくいきは ふいごのようです」宮沢賢治の「よだかの星」の一節を思い出す。右手にはあってある縄を手に、不安定な足を一步ずつ引き上げ、修蔵の炭焼き窯から100㍍も上がったろうか、ようやく大幽の洞穴入り口にましら・安楽さん、冷静・片平さんの背中を見る。悠々・滑志田さん、沈着・浅川さんも上がってくる。



間口12㍍、奥行き21㍍、最高2・5㍍の大幽は真っ暗で、中はほとんど見えない。悠々・滑志田さんの「柱状節理岩盤だな」とのつぶやきが聞こえる。足元は無数の板状の岩が無秩序にひしめき、落石があったことを感じさせる。奥の真っ暗な方がやや低く「正殿の間」というのは、あとでパンフレットを見て知ったが、その他「客殿・狩人・奥殿・琴泉」と命名されている間があるそう。

ふりかえれば朝日岳の方だろうか、山影がかすんで見える。もう数㍍も登れば尾根につきそうだが、その気はもはや無い。その尾根から洞穴脇に水が流れ落ちている。名倉川の源流のひとつになるのだろう。

洞穴を少しはいったところの岩に、大幽の由来がはりつけてある。「ヤツカハギ（神獣）が住んだという大幽は、昔は獵師の宿にも使われ、入り口は狭いが中は広く、冬の氷柱が美しい。この穴にわたりを追い込んだら、越後に抜け出たという」と。



ヤツカハギは漢字で書けば 八束脛。すねの長い住人だったようで、大和朝廷に服属しない先従

民族の蔑称といわれ、国巢、土蜘蛛とも言うという。神武天皇が東征のおり抵抗し、討たれた長脛彦(大和国鳥見トミの土豪)も、そうであったげな。ここ上野・藤原地区でも大和朝廷勢に追われ尾瀬や越後やあたりに逃げた先住民が、大和朝廷領とされた当地区をときおり荒らしまわった話が、ヤツカハギとして今に伝えられているのだろうか。ヤツカハギにそこはかたなく被征服民族の哀歓を感じるのは、私ひとりだろうか。

大幽からの下りが、また大変。コース、大幽の洞穴内での事故等はすべてご利用者者の自己責任、とパンフレットに謳ってあろうが無かろうが、左手(ゆんで)に縄、右手に握りこぶし、口をへへの字に結んでの下り道、足がツーツとつべった。危なかった。

修蔵の炭焼き窯を過ぎれば、足元の危険は無い。登りのときに見過ごした「平石十二社」を、ましら・安楽さんがめざとく見つける。大幽沢十二社とおなじ大樹と切妻の石造り神社のセット。2礼2拍手1礼をして、下がる。

こんどは左耳に名倉川のせせらぎが聞こえる。グリーン・グラスのみなさんはもう、目覚めただろうか。



## 山里の忠犬ゴン

水上藤原の里は、水と緑と澄んだ空気に包まれた自然がいっぱいの懐かしさがあります。民宿「山椒」の主人に仕える愛犬「ゴン」は今年十五歳。ゴンは、主人の野菜畑を春の芽生えから、秋の収穫のころまで守っています。冬の積雪期間は、主人のもとに帰省してまた春を待つのです。

「山椒」の主人は、今朝もゴンの畑へと出かけるつもりでした。私達は畑の見学とゴンにもあえたらと思いお願いして動向させていただきました。早朝5時、朝もや煙る静寂の中、ひんやりと肌に風を感じながら車で十数分行くと、山あいの開けた台地が畑になっていました。



この地区に居住し、開拓を始めて三十余年、思考錯誤しつつ、研究を重ねてこられた成果をそこに感じました。

茄子、胡瓜、西瓜、南瓜、瓜、ピーマン、豆類、トマトはハウス栽培、その他種々の植栽と樹木、どれも見事な実りがあります。それこそ一本一本に丹精込めて、手入れがなされています。

しかし、始めの頃は、実りがあっても夜間周辺の山々から猿達が群れを成して出没しては、収穫前の作物を食い荒らされて被害甚大であったことも度々でした。むなしくなって氣力を失いそうになった時もあったのです。



そこで「山椒」の主人は、生まれて間もない引取り手のなかった子犬のゴンを育てて、畑の脇に犬小屋を設置し、夜間だけゴンを畑に放しました。するとゴンは、サルらの襲来を察知し、吠え追いかけてまわって、見事に撃退したのです。以来「犬猿の仲」は継続中。

今朝はご主人が頭をなでなで「ゴン留守番してたか、ご苦労さん」と、声をかけながら朝食の缶詰を開けると、あっという間にゴンの朝食は終わってしまった。食事が済むとゴンは畑の周辺を駆けまわって、戻っ

てくると私たちの周囲も二、三回回りました。何かなと思ったのですが、ゴンの歓迎の挨拶の様子にも、思えるのです。私達人間には、吠えたりしないのです。帰り際に、「ゴン留守番だよ」とご主人が頭をなでると小屋の中へ入り、窓から顔を出して私たちの車が見えなくなるまで見送ってくれました。「ゴンがんばってね。」胸に熱くなるものがありました。

朝食の善意は今朝取立ての丸ごと胡瓜が並び、カリカリとおいしかったこと。

「ゴン」に感謝。

### 3.10月までの事業計画、等について

8月の水上町藤原区の祭事予定

武尊神社まつり 8月1日(金)

清掃・神事、等

諏訪神社まつり 8月17日(日)

獅子舞・奉納相撲

区民まつり8月22日(金)～23日(土)

湖水踊り・バザー・福引き・花火・子供御輿

藤原湖一周マラソン大会8月24日(日)

首都圏より2,000人参加

第3回フィールドスタディー開催

9月14日(土)～15日(日)ミズナラの森の調査と古老ヒアリング  
+番小屋造り

第4回フィールドスタディー開催

10月18日(土)～19日(日)茅原と沢筋の調査、古老ヒアリング  
茅刈り+茅の輪づくり

### 4. 会員・会友の募集状況と会員名簿

### 5. 藤原区費の納入と会計収支報告